

一人の力は小さくても

労働者委員 大島 幹敏

霧島市在住の組合員のご息が拘束型心筋症に苦しんでおり、アメリカでの心臓移植しか助かる術はないということを昨年12月に知りました。連合鹿児島としても、少年の命の灯を消してはならないとの思いから、一丸となってカンパへ取り組みました。結果、目標金額である145,000,000円を上回る事ができ、渡米し2014年7月9日には手術も無事終了しました。お母さんからは「ドナーの方からのニューハートという大きな宝物を大切に一所懸命生きていきます。」というメッセージをいただきました。

カンパの目標額が集まったのは連合の仲間一人ひとりの力の結集によるものだと思います。よく、労働組合では「一人の百歩より、百人の一步」という言葉を使っています。一人ひとりの力の結集こそが労働運動の力であると考えているのです。まさしく、この一人ひとりの一步の積み重ねが、大きな成果となったのだと思っています。一つひとつは小さな小さな力かもしれませんが、その力が積み重なって大きな力へと変わっていくことを体現できたものだと思います。

自由競争至上の考え方や短期的な視点からすると、「一人の百歩」は効率的で最大の成果を得るのだから、最大の効果がだせる一人がいれば事足りると考えがちです。しかし、中長期的な視点から見ると、一人の力だけでは限界があり、組織が総体となって物事を進める方がより多くの成果を生み出すことに気が付くのではないのでしょうか。

近頃、自由競争原理主義的かつ経済合理的な考え方により、これまでの日本的な労働環境や働き方のルールを改悪しようという動きもちらほら見受けられます。働く私たちが安心して、長期的かつ安定的な成果を生み出していくためには、今こそ中長期的な視点からの取り組みがいて感じています。突出した一人だけにスポットを当てるような、短期的な視点による合成の誤謬を繰り返す愚を犯してはならないと考えています。

「私たちは微力かもしれませんが、しかし、無力ではありません。」一人ひとりの小さな力であっても、行動をおこせばその集合体は大きな力となります。一人ひとりの声を集め、力を集めた団結の力をあらゆる場で発揮できるようにしたいと考える今日この頃です。